

第3章 わかやまの自然と生活



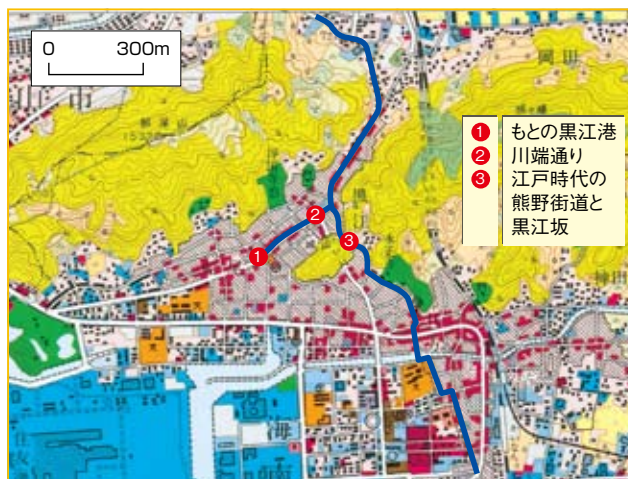
歴史のある町並み



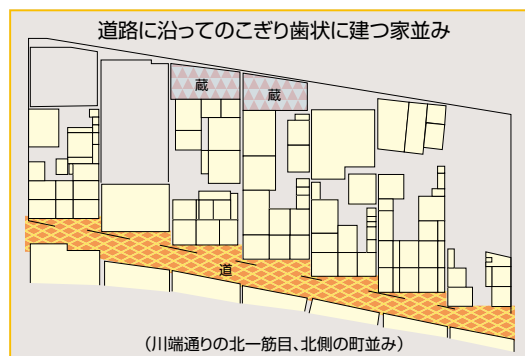
関連地域の位置

黒江の町

黒江は海南市の北西部にあり、伝統ある紀州漆器の生産地として知られています。その地名は万葉集にも歌われた昔の入り江に、黒牛に似た大きな岩があったことから生まれたといわれています。黒江は江戸時代の熊野街道が通った黒江坂の西に、紀州檜を使った木椀を起源とする漆器の町として、紀州藩の保護を受け、発展しました。その後、1879（明治12）年には戸数が1,343戸、人口は5,356人を数え、すでに現在の黒江の人口を上まわっていました。



* 1 黒江の町



町の中央には港につながる運河が掘られ、兩岸の川端通りには漆器問屋が、その裏通りには漆器職人の仕事を兼ねた住宅が軒を連ねました。港の荷揚げ場から黒江坂にかけて山側より木地師・下地師・塗師・加飾師というふうに、それぞれの職人ごとの町並みができていました。1930（昭和5）年には、商工業に従事する人が黒江の町全体（西の船尾地区を含む）の約90%にもなり、そのほとんどが漆器産業にたずさわっていたそうです。

大正時代に運河が埋め立てられ、幅12m、長さ230mの道路となった川端通りとその裏通りには、今も切妻屋根に紀州連子とよばれる格子や漆喰壁のある低い2階建ての古い家屋がみられます。それぞれの家屋は道路に沿って斜めに建てられたので、のこぎり歯状の家並みになっています。道路に面した三角形の空き地は、駐車場などに使われていますが、もとは漆器の原料や製品、荷出し車などの置き場として使われていたようです。

漆器に化学原料が用いられるようになると、製造業者の多くが1970年ごろから黒江の北西に位置する岡田につくられた漆器団地に移転して、町は変わっていきました。しかし、手作りと機械化の技法を合わせもつ紀州漆器の伝統を守りながら、古くからの町並みを活かした町づくりが進められています。



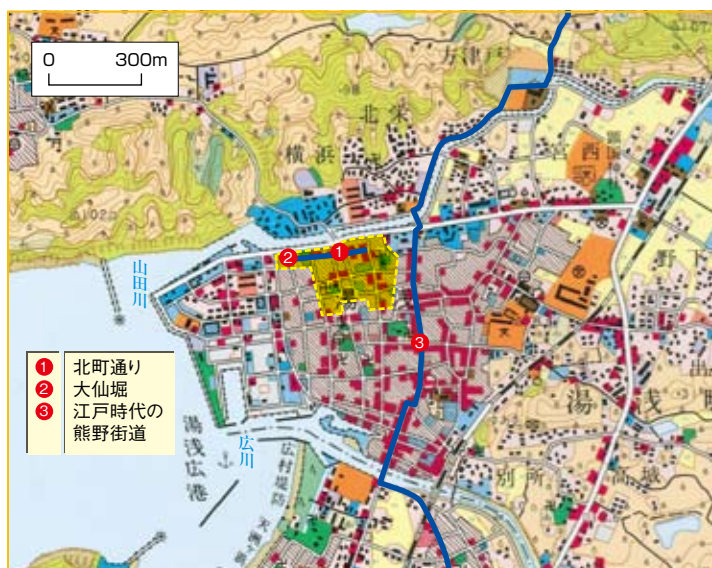
黒江の町並み（海南市）

* 1 地図は、国土地理院2.5万分の1土地利用図「海南」（1979年）。

湯浅の町

湯浅の古い町並みは、北の山田川と南の広川にはさまれた河口部の低地にあります。

湯浅はわが国の古い醤油づくりの町として知られ、江戸時代には紀州藩の保護もあり多くの醸造家ができて醤油産業を中心とした商工業が発達しました。19世紀中ごろの調査によると、戸数が1,255戸、人口は5,546人を数え、幕末には城下町和歌山に次いで人口の多い町として栄えていました。また、湯浅は江戸時代には熊野街道の宿駅であり高野街道との分岐点でもありました。昭和の初めごろまでは汽船が出入りする紀伊水道の港町として、有田地方の交通や経済に重要な役割を果たしていました。その後、鉄道や自動車が交通の中心となるにつれ、その役割はうすれましたが、国や県の出先機関が置かれるなど、湯浅は今も有田地方における行政の中心地としての役割をもっています。



*1 湯浅の町

重要伝統的建造物群保存地区



湯浅の町並み（湯浅町）



山田川河口の大仙堀（湯浅町）

J R 紀勢本線の湯浅駅に降りると、せまい路地に昔ながらの家屋が建ち並んでいるのがわかります。南へ下り広川の河口に出ると、港に古い石垣が築かれていて、江戸時代には船着き場であった様子がうかがえます。北へ道町通り（熊野街道）を行くと、本町通りとの交差点に熊野街道の道標が立ち、道路に沿って古くからの商店や熊野詣ゆかりの寺があります。さらに、北町通りにかけては近世から近代の建物がよく残っていて、格子窓、虫籠窓のある厨子二階の家屋や、また漆喰壁や黒壁の家並み、分厚い壁の土蔵などがみられます。

また、1944年まで有田鉄道が敷かれていた山田川の河口には、醤油の積出港として造られた大仙堀と呼ばれる船だまりがあり、当時の面影をとどめています。そして、付近には江戸時代後期からの古い醸造元があり、今も湯浅醤油の伝統を守り継いでいます。このように、湯浅には古くからの町並みに伝統産業が息づいています。

なお、旧市街地の北西部・北町・濱町・中町・鍛冶町の一部を囲む約6.3haは、2006（平成18）年12月に、県内で初めて国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

*1 地図は、国土地理院2.5万分の1土地利用図「湯浅」（1979年）。
 *2 虫かごのような窓。
 *3 低い二階建ての建物。
 *4 歴史的な集落・町並みを国が認めて保存に指導・協力する地区をさす。